

研究雑話 (30)

フランスの障害者教育・福祉事情(十四)：諸結果(二)、だれとどのように、関係が発達する。

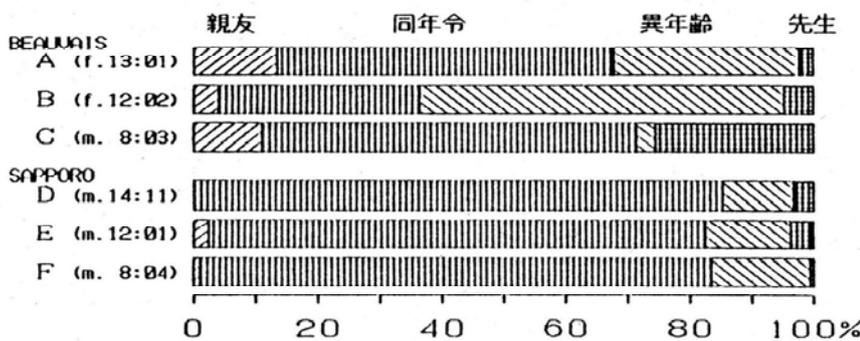
藤井力夫

前回は、諸結果(一)、「戸外でできることを室内でしてはならない」とする原則がどのように適用されているかについて紹介しました。日本では教室や体育館あるいは廊下まで、運動や作業に多用。フランスでは、体育館は肋木等を使った体操、フープつかまり、柔道など、室内運動以外ほとんど使いません。逆に、日本の養護学校で柔道を取り入れているところはない。時間割の関係で余裕がないものだから、戸外での活動を体育館で実施。残念ながらそんな傾向があり、活動自体、小さくさせてしまっているようです。

今回は、誰とどのように遊んだり勉強しているのか、活動集団の違いについてお話ししたい。図Bはすでに紹介したボーベ養護学校のAさん(十三歳、女、クラスA)の一日の対人関係の五分毎の記録。図中Cが関係水準。複数の子どもを相手にしたやりとりは、この日二十五回で、十七%。一人の子どもの関係、二十六%。先生が間に入っている子どもとやりとり、十五%。先生と二人で十%。一人だけが四十五%。一人を基礎としつつも多様な関係がつけられていることが理解できる。教師の働きかけ(A)があつてのこと、ことばがけだけでも四十四回、三十五%はあつたことになりま。

図Aは活動集団。誰と活動したか、一週間の学校生活を大まかな年齢手段で集計したもの。寄宿舎でない子もいるので宿舎での活動は除外。対象児は前号と同じ。日本はほとんど同年令集団であるのに対して(札幌、八十五%八十二%、ボーベ、六十八%三十六%)、フランスの場合、小学部低学年を除いて異年齢集団での活動(札幌、十三%十一%、ボーベ、五十八%三十%)。さらに興味深いことに、多様な集団であるにもかかわらず、先生による個別指導もきちっと確保(札幌、三%、ボーベ、二十四%二%)。とくに八、九歳児におけるこの差は大きい(図AのFとC、札幌、一%、ボーベ、二十四%)。低年齢で学級規模も同じと考えていただいでよい(札幌、七名、ボーベ、八名)。(北海道教育大学教授)

図A. 活動集団 (クラスの中層に位置する児童生徒の学校生活一週間における割合)



図B. A. G (f 13. 01 yrs old) 1985. 11. 26 (木) I. M. P. de BEAUVAIS

